



● 米山記念奨学生 許 金陽 様

### 自己紹介

皆様、こんにちは。初めまして、私は中国から来ました米山奨学生許金陽と申します。本日はこのような機会をいただきありがとうございます。

私は2018年6月に中国の汕頭大学の医学部を卒業しました。日本の入学式は4月のため、私は中国で約1年間日本語を自学し、2019年1月に来日しました。新しい環境にすぐ馴染むと共に、新しい生活へのワクワク感は今でも覚えています。

当時は2回目の来日ということもあり、中国の大学で臨床医学を専攻とした私は、4回生の時に国際交流の機会日本で1ヶ月間留学していました。2週間の基礎実験見学と2週間の臨床見学を受けました。

基礎実験見学では、日本人学生と一緒にセミナーに参加し、基礎知識の学びだけでなく、議論を通して日本医療の濃厚な学術雰囲気を感じて、学術研究に強い興味を持つようになりました。中国に戻った後、指導先生と共同でアメリカのジャーナルへ論文投稿をしました。

臨床見学では、日本の医療現場を目の当たりに、患者と医者との関係の調和を身に染みて感じました。医療資源の配分問題が日々深刻になりつつある中国とは違い、日本では診療所の資源が豊富で、日本のクリニックは初診を担って、病院に案内するための患者さんのスクリーニングを行って、病院の負担を大きく軽減したと思います。一方で、中国は日本のようなクリニックは存在してはいますが、医療水準は低く、多くの患者さんは直接病院に行き診察を受けるケースはほとんどです。医療現場での見学で、医者さんのテクニックのきめ細かさと、指導先生の熱心な教えに感心し励まされました。その刺激を受けて、大学卒業後、博士課程への進学を決意し日本留学を始めました。

私の趣味は旅行をすると料理をすることです。国内外問わず、旅行が好きです。旅行は異文化に触れることで新しい体験を得られます。観光地、ご当地の料理、宿泊先、交通機関などを細かく調べ、いかに安く楽しめる旅行にできるかをいつも大切にしています。料理は文化の発信にもなり、料理をきっかけにいろんな国の食文化と触れることができます。料理の作り方にも興味があり、その国の料理はこう作られたのだという作り方から、その国の人の性格、物事への接し方も感じとる。

私は中国江蘇省の無錫出身です。無錫市は中国江蘇省の東南部、中国経済が最も発展している長江デルタ地区の中心に位置します。南に太湖、北に長江を臨み、上海から128kmの距離にあります。中国国内でもトップクラスの経済中心都市であり、日系企業を含む海外企業の進出も盛んです。市内には運河や湖など美しい自然に恵まれ、太湖は中国五大淡水湖のひとつ。面積は、琵琶

湖の3倍以上もあり、湖中の48島の小島が、湖に面した山や半島とともに、72峰とよばれ、美しい景色を形づくっています。また、太湖に突き出た鼋頭渚公園の園内には、日本から贈られた桜の木が多数植えられ、春にはたくさんの花見客で賑わっています。寄暢園や靈山大仏、鍾乳洞など景勝地が多く存在し、観光都市としても発展しています。無錫の歴史はなんと紀元前から始まります。三国志に登場する呉の発祥の地でもあり、当時は製鉄業が盛んだったそう。「無錫」という地名は、「錫（スズ）」が無くなるまで掘り尽くしてしまった地という意味だといわれています。現在でも、隋の時代（遣隋使の時代です!）に作られた大運河が市内をゆったりと流れています。無錫名物と言えば「無錫排骨」。豚の骨付き肉を甘く煮込んだ料理です。ほかに「肉餡面筋（ひき肉餡入りの中国麩）」や、太湖で採れる銀魚（シラウオの一種）料理も有名。お土産にしたい工芸品は、泥人形と呼ばれる素朴な人形と紫砂の急須。

私は小学校3年生からずっと仏山市で生活しています、仏山市と無錫市の文化や料理なども全然違います。仏山は嶺南文化の中心地です。広東オペラ、中国武術（カンフー）、ドラゴンダンス、陶器でよく知られています。仏山の古寺では、この地方の文化の一端が分かります。嶺南の古典的で華麗な建造物を見るほかにも、中国武術やドラゴンダンスのパフォーマンスを楽しめます。仏山はイップマン、黄飛鴻、ブルースリーなど、中国武術の達人の故郷でもあります。嶺南天地は文化芸術地区で、昔ながらの古い住宅街から現在の街に変貌を遂げました。この新旧が出会う地区は、仏山の新たなランドマークとなっています。順徳は食べ物で有名です。広東料理の重要な一部分をなしている順徳料理が、グルメや大食漢をひきつけてやみません。

## 研究内容

私の本学大学院における研究テーマは、「分子標的薬レンバチニブの副作用に対する漢方エキス末（補中益気湯 ツムラ41, TJ41）の効果および同作用機序に関する基礎研究」です。日本において1981年以降30年以上にわたり、悪性新生物による死亡が死因の第1位となっている。厚生労働省から発出されている最新の人口動態統計資料では、2019年の年間総死亡数約138万人のうち悪性新生物は27.3%であった。肝がんはがん関連死亡原因の第2位であり、世界で年間約75万人が亡くなり、毎年約78万人が肝がんを診断されています。地域差も大きく、中国、日本を含むアジアに新規患者様の約80%が集中しています。日本では、肝細胞がんの患者数は約4万2,000人、年間死亡数は約2万6,000人と報告されています。肝細胞がんは、肝がんにおいて最も発生頻度が高く、肝がん全体の85~90%を占めています。肝細胞がんの第一治療選択は外科手術ですが、根治的に適さない切除不能な肝細胞がんの場合は、治療薬に限られており、予後が極めて悪いことが知られています。進行した切除不能なHCCに対する治療は、分子標的治療薬が推奨されている。切除不能な肝細胞がんの一次治療薬であるレンバチニブは、約4割の奏効率を有し、conversion手術による根治の可能性も示唆されているが、一方で高血圧、疲労、食欲不振、蛋白尿、血小板減少などの副作用症状が出現することが治療完遂の弊害となり、問題となっている。しなしながら、これらを軽減する有効な薬剤は確立されておらず、現在、新たな治療戦略が必要になっている。

漢方薬の補剤（補中益気湯 ツムラ41, TJ41）は、胃腸の働きを整えて元気を補う薬で、気力がわかず、だるくて疲れが取れない人に対しては役に立つ薬です。また、抗がん剤の副作用の改善および予防に効果があると報告されている。私の研究においては、補中益気湯のレンバチニブによる副作用抑制効果についてマウスを用いて検証し、新規治療法を提案することを目指している。この研究を通じて、患者さんが抗がん剤を服用したときに感じる副作用を少しでも減らすことができるようです。

## 学生生活

今は兵庫医科大学博士課程3年生をしていて、この2年余りの学生生活の中で一番感じた日本ならではのものといえば、日常の中でよく敬語を使う文化です。

中国のコミュニケーション文化と少し違うのは、日本は大量の敬語を使用しながら人とバランス良く一定の距離を保ち、相互の間に十分な遠慮と礼儀があるところだと私は思います。たとえみんながお辞儀をしながら同じ話をしていても、口調から世話になる人と世話する人を見分けることができます。日本の友達に「なぜ敬語を自然と使うようになった」と聞きましたが、もともと敬語を話すのも社会の安定を保つ重要な要素であることを知りました。敬語を使うか使わないか、どんな敬語を使うかは、すべて発話者との間の距離を象徴していると思い知りました。正しい敬語を使うことで、人を組織の中で正しい位置につけて、同じ方向に力合わせできると感じました。その敬語文化の下では、日本人だけの思いやりは、表面的に冷たいが温情に溢れると私はそう捉えています。電車の中で、他人と視線を交わすことなく、自分のことに夢中しているところは、外国人に冷たい一面を感じさせることも少なくないだろうが、それは公共の場でも他人に自分だけの空間も共に作り上げた思い入れの一面でもないでしょうか、と私はそう思います。研究室では、先生であれ教授であれ、誰もが決まった席で自分の仕事をしていて、普段会話している風景も見かけた時は少ないですが、ただ毎日の挨拶言葉が一日も抜けたことなく、一人一人が自分の仕事をちゃんと守れて、整々たる職場をともに作り上げたそう感じています。

## 奨学生としての心得

今年の4月から、私は米山奨学生になりました。採用されてからそろそろ半年になります。この半年間、近カウンセラーを始め、クラブの方々に本当にお世話になりました。そして、一か月一回の例会に参加させて頂くことによって、皆さんの奉仕の精神を凄く感じました。

この奨学金は、私の留学生活に経済的に助かることはもちろん、国際的な交流や理解など貴重なイベントを経験させました。これまでの奨学生生活を通して大学と異なる社会空間で人生の先輩との交流から生活の意味を新しく理解できました。私たちは他人との関りの中で生きているのではないのでしょうか。各ロータリークラブでもよく実践されている積極的な交流の大切さを学び、交流は文化・国境を越え、様々な場面で使われ、それらのすべては、「理解」「平和」のもとに成り立っているのだと強く感じています。これから、自分もこの組織のために存在する人間になり

たいと思っています。人と人をつなぎ、人間の心と心をつなぎ、それに必要な場、環境を作れる人間になるため、努力していきたいです。この奨学金のおかげで、私は、学習に集中でき、抗癌剤に関する研究を順調に進めてきました。卒業まであと1年半があります。卒業までに、できるだけ研究に取り組みながら、社会貢献し活躍をしていきたいと思っています。将来卒業後、日本で学んだ先進的な医療知識を使って、中国のより多くの患者を救える医者になりたいと思っています。また、4年間の博士課程という貴重な経験を生かして、中国と日本医療の学術交流にも貢献していきたいと思います。そして、感謝の気持ちを持って、将来母国と日本との懸け橋となって国際社会で活躍することを目指し、国際平和の創造と維持に貢献する人となるように、今後も頑張っていきます。